踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

奥多摩	三頭山から笹尾根（甲武相国境稜線）縦走	No.008

山歩きを始めて最初に買った国土地理院五万分の一地形図「五日市」。閑さえあれば地図を眺める日が続き、なぜか不思議な稜線を見つけ出して、行けそうな所かどうか調べて見るようになった。
そして見つけた稜線が、浅間尾根であり石尾根であり、笹尾根だった。

笹尾根は、奥多摩では浅間尾根（8月に縦走）とともに入山者の少ない稜線で、薮こぎの可能性もある。
西端に奥多摩では御前山と並び称される三頭山（1527.5m）、南東に走り北側の谷は南秋川の辺境（東京都）、南側に鶴川の谷（山梨県）を眺め、醍醐丸で奥高尾の峰と合している。生藤山（990.6m）より先の稜線は南面に神奈川県津久井郡を見る。その名のとおり、甲武相三国に跨るのである。生藤山の西に三国山という山があるのもそんなことによる。
また、雑誌「山と渓谷」や「岳人」などで、夜を徹して歩く「かもしか山行」のことを知ったのもこの頃だった。
山歩きを始めてから二度目の単独行で、しかも初めての二日の旅という点で記念すべきものだった。
笹尾根には営業している山小屋はひとつもない。造林小屋があれば使わせて貰えるかもしれないが、その場まで行ってみないとわからないし、まだ寝袋もツエルトも持っていなかったので野営はできない。月明の中で歩き通すことも想定して満月の日を選んだ。登山経験の浅い自分にはかなり難易度の高い山行で、コースタイムの組立てやエスケープルートの事前確認など、細部にわたって吟味した。

昭和 36 年 9 月 23 日
いつもの列車（6:20発各駅停車長野行）で出発。氷川に8時45分に着いたが、小菅行の一番バスは 40 分前に出てしまい、次のバス（9:55発）まで約一時間待つことになった。事前に調べておいたバス時刻の情報が古かったのかもしれない。出足からつまずいてしまった。
9時55分発小菅行のバスに乗り、余沢で下車。手際よく身支度を調えて白沢川の谷沿いに走る広いトラック道に入る。炎天下を一時間半ほど歩き、12時20分に鶴峠に到着。地形図の等高線を読むと海抜 950mほど。バスを降りて歩き始めた余沢は 583mだったので、単調なトラック道で約 350m登ったことになる。
腹も減ったので山道に入る前に昼食。鶴峠を13時に出発、まずは奥多摩の名峰三頭山を目指す。
1087m峰に取り付き、そこから尾根の北側を巻くように登って行き、小焼山から三頭山の西側に高く張った肩を目指す。1300mを越すと、緩やかながらボリュームのある最後の登りが待っていた。
14時50分、三頭山に到着。三頭山は最高点が 1531m、これを挟んで西峰は 1527.6m(三角点)、東峰が1528m。三つのピークがあることから三頭山と名が付いた。
ガスが出てきたが、切れ間から奥多摩湖の水面が見えて、中々の眺望。鞘口峠を挟んで御前山も負けじとどっしり構えている。ここが目指す「笹尾根」の起点になる。長く伸びた稜線を眺めていると、活気が湧き出てきたり、不安感がよぎったりの複雑な心境になる。15時15分、三頭山を後にして、笹尾根に踏み込み開始。
最初のピーク大沢山（1482m）を通過して小さなコルに出ると、ハチザス沢に小さな小屋が見える。しばらく歩くと、稜線から小屋に向かって小さな踏み跡がついているので下ってみる。杣人が泊まるのに使っている小屋らしい。きちんと石を積んだ竈と、沢の水を竹で引いた水場も作られている。時計を見ると16時45分、鍵もかかっていないので今日の寝床はここに決定。
晩飯はインスタントラーメン二人分に昼の残りのバター付フランスパン。空にはこうこうと満月が照り、さらに一面の星の光も合わせて薮の深い稜線を明るく照らしている。

踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

地図とガイドブックを眺めて明日のことを考えることにしたが、この稜線をはさむ南秋川と鶴川の谷沿いの集落に目を走らせると、興味深い地名が並んでいるのに驚いた。南秋川の一番奥にあるのが「数馬（かずま）」、下ると「笛吹（うずしき）」、「人里（へんぼり）」。上野原の方に目をやると、「郷原（ごうはら）」、「遍盃（へはい）」、「西原（さいはら）」、「初戸（はど）」、「猪丸（いまる）」・・・・、これらを歴史的に調べてみたら面白そうだ。ガイドブックに載っている各地に伝わる伝説なども読みながら勝手な想像をめぐらして、眠気を待った。
まだ寝袋など持っていなかった上に、今回は人がいる小屋など存在しないことも承知していた。とにかくどこかでビバークしなければならないと思ってはいたが、どこでどんな格好で夜を過ごすのかは状況による判断とした。それに見合うだけの衣類だけは用意してきたので心配はない。しかし、こんな所に立派な小屋があることなど予期もしていなかった。19時20分　セーター、ジャンパー、ももひきと着こんで小屋の板の間に横になる。

昭和 36 年 9 月 24 日
目が覚めたら0時半、起き上がると、月は頭上に鮮やか。ラーメンを食べて身支度をして、火の始末と使用した部分のお掃除を済ませて、2時10分行動開始。
満月の下では何の人工照明も要さない。熊倉山の鞍部に出るべく踏み跡を辿ったが、どこかで見失ったようで途中から藪こぎになってしまった。煌々と照る月光の中で夜露にぬれながらガサゴソやること小一時間で稜線に出た。藪を漕いでいる間に狸か狐かそれとも本当の人間か、一点の明かりが稜線を走って行った。
3時40分大沢山、まだ日の出前。北に黒々と御前山、鋸山、浅間尾根が、そしてそれにも勝るものは、南遥かに紫色に染まった体を雲上に出している朝焼けの富士。
槙寄山（1188.2m）を越えて数馬への分岐の西原峠に4時40分。小さなピークを越えながら少しずつ高度を下げていく。6時50分、稜線上の適当な平坦地を選んで遅い朝食はパンとおかずの缶詰にお茶。富士山・道志山塊・大菩薩連嶺が大きく連なり、南秋川の谷を挟んで北側には御前山から鋸山への主稜線がパノラマのように広がる。今日も天気は快晴だが、富士山に笠雲があるのが少々気になる。
朝食で力を得て7時40分出発、さらに東へ。笛吹（うずしき）峠は8時半に通過。ここは笛吹から藤尾に抜ける峠道。丸山（1098m）の直下で小休止。丸山を越えて小椢（こゆずり）峠　9時10分。
土俵岳（1005m）　9時40分、ここは海抜 1000m最後のピーク。10分の小休止。
潅木とクマザサの中の辛うじて踏まれた踏み跡をたどると、日原峠10時。水場の表示があるので行ってみたら土俵岳の北東斜面にあったが、水は出ていなかった。まだ水は残っているが、やや落胆の中休止は30分。
峠の一隅に天幕が一張あるので良く見たら「三鷹市役所山岳部」と書いてある。三頭山を出てから久しぶりに見る人間様に懐かしさを感じて声をかけてみると、この稜線の藪を切り開きに来たという。（結局下山するまでに出会った人間は彼らだけだった）
浅間峠11時15分、ここは上川乗への下山路。10分の小休止、そろそろ下山路を考えながら歩かなければならない時刻になってきたので地図を見ながらの息継ぎ。まだもう少し進めそうな気がするので通過。
栗坂峠を通過して熊倉山（963m）の登りに入る。比較的緩やかな登りだし、基本的には低い方向へ歩いているので心理的な負担は少ない。熊倉山で12時15分から13時まで昼食と大休止。
生藤山（しょうとうさん）は 990.6m。国境の木は伐らないという決まりがあり「伐り止め山」と言われていた。
「伐り止め山」→「きっとめ山」→「きっとさん」と変形の上、当て字で「生藤山」となったという面白い山。
ここから南秋川の南郷への道を下ることにした。北に伸びる枝尾根の北面を巻いて矢沢に下りて、矢沢林道に入った頃に数分間俄か雨に襲われたが、それ以外はずーっと快晴。
南郷の学校前に15時55分到着。ここは海抜 300m、三頭山から数えると標高差 1200m余りを下ってきたことになる。絶妙なタイミングで16時10分発の五日市行のバスに乗ることができた。
深夜2時半から歩き続けた疲れで、五日市駅に着くまでの40分間ぐっすり眠ってしまった。（バス70円）
初めての一泊の山行で、しかもほとんど全行程にわたり人間の匂いの感じられない藪の稜線。苦しい登りや焦りの藪こぎもあった。しかし、それらをひとりで乗り越えてきてみると、色々感ずるところの多い山旅だった。

以上

（修正・更新：2023年9月）